



桐医会会報

2010. 3. 15 No. 67



1回生同窓会集合写真

目次

☆教授就任挨拶	武川 寛樹先生	1
☆1回生同窓会報告	松崎 靖司先生	3
☆4回生同窓会報告	江原 孝郎先生	4
☆12回生同窓会報告	関戸 哲利先生	6
☆Experts from Tsukuba ~筑波大学出身のリーダー達~		
	軸屋 智昭先生（2回生）	8
	遠藤 俊輔先生（5回生）	11
☆会費納入のお願い・事務局より		13

教授就任の挨拶



筑波大学大学院人間総合科学研究科

疾患制御医学専攻 頸口腔外科学分野

臨床医学系 歯科・口腔外科 教授 武川 寛樹

2009年7月1日付けをもちまして、筑波大学大学院人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻 頸口腔外科学分野（臨床医学系歯科・口腔外科）教授を拝命いたしました。初代・根本一男先生、2代・吉田 廣先生の後を継いで、歴史ある歯科・口腔外科診療グループの主催を仰せつかることとなり身の引き締まる思いです。

私は1984年に日本歯科大学を卒業し、日本歯科大学口腔外科学第2講座に助手として勤務いたしました。その際に口底癌・両側頸部リンパ節転移の患者さんを担当して、歯科医師だけで口腔癌を診療していく難しさに悩み、医学をもう一度しっかり学びなおす必要性を強く感じて、医学部再受験を志しました。1986年幸いにも筑波大学医学専門学群に入学を許可され、1992年に本学第13回生として卒業いたしました。卒業後は口腔外科の根本教授が退官の時期であったこともあり、横浜市立大学大学院医学研究科（口腔外科学専攻、主任：藤田淨秀教授）に進学しました。藤田教授は日本で数少ないダブルライセンス（医師・歯科医師両方の資格）を有する先生で、通常とは異なる経験の自分を上手に指導していただきました。藤田教授と第1外科の松本教授のお計らいで、平塚共済病院外科（外科部長：熊本吉一先生）で外科のトレーニングを受けさせていただくことができました。1年間と短い期間ではありましたが54症例執刀させていただき、胃亜全摘出術や乳癌切除術も執刀させていただきました。この間に外科学の基礎を叩き込まれたと思います。1995年には大学院を飛び級で修了後、横浜市立大学医学部口腔外科学講座に助手として勤務いたしました。その後、横浜市立大学医学部形成外科学教室（主任：

吉田豊一助教授）で形成外科のトレーニングを受け、1997年にはスイス Zürich 大学の顎顔面口腔外科学教室（主任：Sailer 教授）に3か月間留学させていただきました。欧州とくにドイツ・スイス・オーストリアでは口腔外科医はすべてダブルライセンスを有しております。Zürich 大学では、顎顔面外科の階の中に手術室があり、麻酔医が何人か派遣されており、ほぼ顎顔面外科医の希望通りに手術を組むことができました。また、欧州各地域の口腔外科医のトレーニング医師が Zürich 大学に集まり、手術室で Sailer 教授が手術の実況中継をしながら、若手医師が手術の質問をしたり、各施設の臨床・教育の偏りの公平化などが議論される機会に接し、その非常に優れたシステムに驚異と感動を覚えました。この時、知り合った多くの医師は私の大きな財産になり、その後、International Journal of Oral and Maxillofacial Surgery の Editor-in-Chief に就任した Dr. Piet Haers から同誌の editor を依頼され、7年間重職を務めさせていただきました。

1998年、横浜市立大学歯科・口腔外科の講師となり、2002年に分子生物学を学ぶために千葉大学医学部附属病院歯科・顎・口腔外科（主任：丹沢秀樹教授）に移転いたしました。丹沢教授もダブルライセンスを有する先生で、現在本邦では両資格を有する口腔外科医はもう4～5名しかおりません。千葉大では主に口腔領域の悪性腫瘍の治療方針を学び、また分子生物学的手法による抗悪性腫瘍薬耐性機構の克服や放射線耐性の克服の研究を学んだ後、御縁があり本年、17年ぶりに筑波大学に戻ってまいりました。私がいた頃のつくばは、つくば万博が終わったばかりで、全体に閑散

としていた記憶でしたが、久しぶりに筑波大に戻って、つくばエクスプレスが直結していて、非常に街に活気があるのに驚きました。夜、街を車で走っていて、イーアスやララガーデンの明かりを見て、とても驚きました。

口腔外科学は、いわゆる医科と歯科の境界領域であり、本邦では歯科医師が従事する場合がほとんどです。欧州では口腔外科学を行うのにダブルライセンスが必要な国が多く、資格問題は国際的にも議論のあるところです。個人的な考えとしては、口腔外科学は歯科医学がベースで良いと思います。口腔外科学はやはり咬合という概念が重要となりますし、またダブルライセンスを取得するためには時間と費用がかかり、必要なトレーニングも遅れるからです。しかし、周術期の全身管理や化学療法の副作用を医師の知識と経験を生かして診察できる点や他科疾患の合併症に対する病態の把握・理解の点で、ダブルライセンスが優れたところも当然ながらあります。私はダブルライセ

ンスや医師免許単独の方など、いろいろな資格の先生方が口腔外科学に参画し、得意とする分野を皆で協調してしていく姿が患者さんにとって最も望ましいのではないかと考えております。

私はいろいろな施設で、多くの立派な先生方に出会え、直接御指導を賜る機会を得て、大きな感銘を覚えました。今まで教えをいただいたすべての方々に心より感謝いたしております。人と人の出会いは自分が若い頃に思っていたよりも貴重であり、誠を尽くして敬意を払う必要があると考えています。知らないうちに様々な場所で直接的あるいは間接的に教えを受けたり、また協力し合う関係になるかもしれません。最後は人間関係が最も重要なってくると思います。今後は、私もそのような人間になれるように精一杯努力していきたいと思います。そして本学附属病院を中核病院として茨城県の地域医療に貢献し、口腔外科学全体の発展のために全力を尽くす所存です。今後とも皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

筑波大学医学専門学群 一期生同窓会「四六の会」によせて

平成21年9月12日

「四六の会」は、筑波大学医学専門学群第一期生の同窓会として夏の終わりに開催している。本会は平成21年9月12日（土）に、TXつくば駅に近接したオーケラフロンティアホテルつくばにて開催された。27名の参加予定であったが、各々の事情もあり直前のキャンセルのため、参加者は22名であった。

今回は小職が幹事をするようにと昨年の会で指名された。職場におけるばたばたした騒動の中でなんとか開催に漕ぎつけたという次第であった。18時半の受付であったが皆さん時間通りに集合され、19時には開宴となった。幹事の段取りの悪さにより、今回は特別企画もなく、皆で昔話や近況報告を行い楽しい時間を過ごす一時であった。昨年の会では、工藤前副学長の参加を頂き開学当時の話に懐かしさを覚えたが、今回はとくに恩師はお呼びせずに仲間でわいわいと、四方山話しが弾んだ。

我々は昭和49年に筑波大学医学専門学群に入学、55年に卒業し、あっという間に29年が過ぎ去った。思うと多くのことがあったと今更ながらに思う。光陰矢のごととはよく言ったものである。出席者22名、一期生の約1/4が集まった。多忙な中年世代としてはよく集まることと思う。大学へ教職として残っているもの3名、他学で教職についているもの3名、個人で医療機関運営しているもの9名、勤務医7名である。概ね各職種均等であったのもおもしろい話ができる所以であった。また、本県において医療活動を行っているものが18名と8割近くに及んでいた。これは、本県にいるから集まるということでもあるかもしれないが、欠席した方をいれても、現在、本県にて活躍している一期生は4割（38名）とかなり多くの同期生がいる。一期生は卒業時に多くは大学病院へ残ることができなかつた。100名の卒業で30名弱しか附属病院へ残れなかつた。そのことを考えても、多くの同級生が茨城県で医療をして

いることは大変誇らしいことと思う。大学離れの昨今、大学へ残らずとも卒業県にて勤務していることはどのような理由かを考えることも興味のあることである。医療崩壊の危機に瀕している茨城県（本県だけではないが）という地域を見据えた医療を本県に勤務する医療従事者、とくに筑波大学卒業生は第一に考え実行することが肝要であると思う。

筑波大学は新構想大学として開学し、我々一期生は入学した。開学の理念なるものは今やおそらく形骸化しつつあるのだろう。多くの国立大学法人は、筑波大学と同じような形態をとるようになった。ある意味、筑波大学の大きな初期の役割は終わつたのかもしれない。良き面、悪しき面両者あるのは当然である。それを乗り越え、さらによりよき大学へ発展してほしい。卒業時に大学へ希望者全員は残ることができなかつた一期生だからこそ、険しい道を歩んできている。現在一期生から大学には、4名の教授が職責を頑張っている。是非とも建学の理念を忘れることなく、地域医療を第一としての母校の舵取りをしてもらいたい。

酒が入れば、あっという間に昔に戻る。50代のおじさん、おばさんは青春時代へすぐに戻れるところが仲間である。一期生の持ち前のパワーで今後も地域のため、後輩のために頑張りたいと皆、心では思っている仲間たちである。

写真をみると、昔と変わらぬ人、誰だかわからなくなつた人、様々であるが、いい仲間であり、お互いの財産である。今後も「四六の会」は毎年続いていくであろう。来年の幹事は、県南病院院长の、茨城県のドンになりつつある、塚田くんである。次の会が楽しみである。皆、健康でありたいものである。

松崎 靖司

武内さん浦野君への手紙

(2009年11月28日 4回生同窓会の報告)

平成21年11月28日

時の過ぎるのは早いものです。武内さん、浦野君。君たちの突然の事故死から30年が経ちました。僕は1979年10月のあの日をはっきり覚えています。あの日教室に普段通り入った瞬間、異様な雰囲気を感じました。「何があったのだろう」と思っていると二人の訃報が飛び込んできました。その日から数日間、僕は思考停止のまま過ごしていました。昨日まで文字通り机を並べていた二人の突然の「死」。医学を学んでいた僕に「死とは何なのかと」問い合わせたまま二人は消えてしまいました。卒後数年が経ち僕たち4回生は、紫峯祭の実行委員長を務め、卒後外科医と活躍していた上田廣君をガンで失い。4回生にあってユニークな存在であった泌尿器科医の齊藤真介君を失い。今年、在学中バンドのギタリストとして活躍し、卒後は日本で心臓外科の最高峰に位置する女子医で循環器外科医として邁進し、50歳になって地域医療に転身したばかりの長津正芳君を心臓発作で亡くしました。正に、今年4回生の同窓会をしようと話している最中の訃報でした。また机を並べていた期間は短かったのですが原淳君を亡くしました。(原君ごめんなさい。僕には情報がほとんどありません)

君たちが去って30年となることに気付いた村井君の発案で同窓会を開催することにしました。志半ばで無念の退場となった人々への思いと20数年ぶりの懐かしい顔に出会うべく、2009年11月28日4回生の同窓会が催されました。この会に4回生の約半数の40数名が顔を見せました。もっとも遠方から来てくれたのは富山の成瀬さん(旧姓林さん)で、大半は関東にいる人でした。食事と雑談の後、山口君の発案によりプロジェクターを使い映像にて近況を報告してもらいました。

まずは遠方で来られない鍬方君がファイルを送ってくれ、その画像が写されました。鍬方君は大阪大学で救急医療に取り組んでいること、時に

ジャズバンドでドラムを叩いていることを報告してくれました。また学生時代のバンド仲間であつた今は亡き長津君の貴重なコンサート風景が映されました。長津君の格好良すぎるコンサート風景が25年以上前の学生時代を呼び覚ましてくれました。

福田さんは、女性陣の有志で武内さんの墓参りをした時の写真を写してくれました。さすがに女性陣は武内さんの命日を忘れていたようですが。女性陣の結束の強さが感じられました。大学に残っている数少ない4回生の一人である福田さ



開会を宣言する村井君



大学の近況を報告する福田さん

んは筑波大学の近況を報告してくれました。大学病院が新しくなることで、また一つ大学の風景が変わりそうです。

近況報告で印象に残っているのは、Y君の「最初は教授を目指したが、美貌と口の悪さで早々に教授の道をあきらめお金儲けに走りウン千万の年収があった」と発言。しかし「術後管理が心許なく、良心がとがめて総合病院へ転身した」とのこと。貴重な存在となりつつある外科医はアメリカへ行かなくても日本でウン千万円を稼げるようである。五十歳となつてもダンディーなY君であった。

数冊の本を出している精神科医の山登君は「営業で」自著を紹介。開業医である山登君の診療所に菊川怜が来ている映像が写され、「患者?」と思いまや写真撮影のみだったとのこと。また、虫垂炎から腹膜炎を併発した体験談を披露し健康には気をつけましょうとアピール。最後に自分の本は「本屋さんに並んでいるのでは非賣ってください」と締めました。新書を数冊、学術書も出している山登君がありました。

次に印象深かったはK君の近況報告で、つい最近「臨死体験」をしたとのこと。健診で見つかった房室ブロックのためペースメーカーを埋め込む手術をしたところ術後感染による敗血症を併発、やむなくペースメーカーを取り外したところ、心拍数がやけにさがるなと思っていたら意識がなくなり心肺蘇生を受けたとのこと。心臓圧迫により血液が送り出されると意識が数秒戻ることを身をもって知ったとの由。奇跡的に生還しペースメーカーの再装着で現在は事なきを得ているとのことである。本当に恐ろしい体験をした様である。山登君といいK君といい医者も大変な目に会うようです。

M君は「女性陣が皆変わらない、いや皆素敵になった」と女性陣を讃えました。「職業を持って第一線で働いていることが若さの秘訣では」と発言。男性陣は賛同していました。

などなどの近況報告や楽しい会話の

内あつという間に4時間が過ぎ、数年後の再会を約束し、お開きとなりました。解散後、半数は帰途に半数は二次会へと繰り出したのでありました。

今回同窓会を開催し判明したのですが昭和52年入学の4回生は、武内さん浦野君以外全員無事卒業し国家試験も合格していました。以前、僕が報告した4回生の進路で不明となっていた人も健在であることが判明しました。

武内さん浦野君、このような僕たちですが学生時代の数年を共に過ごした、あなた方を決して忘れないでしょう。

では、また。

江原 孝郎



近況に聞き入る出席者



抱えてる 孤独の海の大きさが 財産である 青林檎たち 中原千恵子

～12回生ホームカミングデー&同窓会～

平成21年10月11日

筑波大学双峰祭の期間中に、卒後20年目（医学は18年目）の卒業生を招待してホームカミングデーが開催されています。今年で12回目の開催とのことで300名を越える参加者があり、全体としては盛会との印象を受けました。医学からは、私を含めて5名の卒業生とその家族が出席し、また、医学の関係者としては山田学長、五十嵐病院長、山縣教授のご臨席を賜わり、今後の筑波大学の展望を含めた話に花が咲き有意義な時間が持てました。普段余り自覚していない「筑波大学の卒業生」という視点が再認識出来た事は収穫であったと思います。

この機会に約7年ぶりとなる同窓会を企画しようとの事で、大学に在職しているメンバー、つまり、前野君を中心に、飯田（多田）さん、金森君、木澤君、木内君、福永君、宮川（野口）さん、小生が集まり、「友達の友達は…」方式で、最終的に何とか大部分の同期の方々に連絡をつけました。当初はホームカミングデーの案内と一緒に同窓会の案内を同封し大学から一括して送ってもらったのですが、ホームカミングデー関連の資料が多くて同窓会の案内に行き着く前に処分してしまった（！）人が多かった様です。開催の2週間前までは参加者が10名に満たない可能性が危惧されましたが、蓋を開けてみれば31名の同期の方々とそのご家族が参加され、会場である樓外樓の個室はすし詰め状態の盛会でした。ただ、10月11日の日曜日開催という日程的な問題から、お子様の運動会やご自身の学会発表でかなりの方が参加出来なかったのが残念でした。同窓会の準備に十分な時間が割けなかった関係上、アトラクションめいたものは特に用いませんでしたが、連絡がついた同期の方々には「近況報告」をメールで送ってもらい、集まったものを綴じて卒業アルバムと一緒に会場で回観し、完成版を改めてメールで配信する事になりました。なお、会の途中で、



谷田部恭君からの事前の提案を受け、先年、闘病の末に若くしてお亡くなりになられた菅野君のご冥福をお祈りするため、菅野君の親友の林君の挨拶の後で黙祷を捧げました。

我々12回生は、1985年、筑波で科学万博が開催された年に入学し（常磐道が東京と直結した年でもあります）、M4の時に東医体の総合主管（第31回夏季大会）を経験し

た学年です。在学中に
「クレオ」や今は別の店舗になっていますが「ダイエー」が建設され、
「高速バス」が開通し、

また、「つくば市」の誕生に伴い「村民（新治郡桜村）」から「市民」になる等、筑波が「陸の孤島」から現在の「秋葉原まで45分」に至る、その発展が加速される端緒に学生時代を過ごしました。さらに、在学中に「昭和」から「平成」に年号が代わり、「ベルリンの壁崩壊」に代表される世界情勢の大きな変化

現
住
所
〒305

茨城県新治郡桜村天王台一丁目
筑波大学医学専門学群四
電話〇二九八（五三）二九七
茨城県筑波郡谷田部町春日四
高野住（五一）三十
（五二）宅七
〇号
一室古

運
營
委
員
會
〒305

もありました。色々な意味で、"Change"と隣り合わせだった年代かも知れません。とは言え、久方ぶりに筑波を訪れた同期の方々にとって、今のつくば駅周辺の風景は隔世の感があったようです。

参加された同期の方々は、毛髪量、体型に大きな変化は無く学生時代にタイムスリップした感じ。でも、皆、卒後約20年の間に、親になり、留学し、病院の管理職になり、医院を立ち上げ、教官になり、ラボの中核になり、医薬品等を含む医療・福祉行政に携わり、等々、卒後18年という短いとは言えない時の流れを感じさせる近況報告に感慨もひとしお。自身の知識や技術を磨く一方、中間管理職的な業務や後進あるいは医療スタッフの指導にも相当の時間を割いていて、その苦勞がヒシヒシと伝わって来るのは、はやり40台半ばに差しかかっている証左なのでしょう。皆、食事をするのも忘れて話に興じていた様子で、約3時間があっと言う間に過ぎてしまいました。

「医療崩壊」という悲観的な言葉が日常茶飯事

化している昨今ですが、同期の方々は学生時代同様、その表情は明るく前向きな印象を受け、エネルギーを充電させてもらったのは私だけでは無いと思います。"Yes, we can" —同期の有り難さを改めて実感するとともに、「まだまだ日本の医療は大丈夫だ」との感慨を抱きました。

最後に。筑波大学が今後、益々発展して行くためには学内外の卒業生の支援が欠かせないと思います。臨床は勿論、臨床以外の様々な分野でも卒業生が活躍している事は本当に貴重な事です。桐医会が、医学の同窓会のコアとして長期的なビジョンを持ち、今後、益々、発展される事を祈念致します。

関戸 哲利

追補：良い表題が思い浮かばず、この機会に初心にかえるという観点で、我々が卒業の時に当時小児科講師であった中原千恵子先生が詠んで下さった短歌を使わせて頂きました。ご高配を賜われば幸いです。



Experts from Tsukuba

～筑波大学出身のリーダー達～



筑波メディカルセンター病院長に就任して

財団法人筑波メディカルセンター
筑波メディカルセンター病院
病院長 軸屋智昭

桐医会から原稿依頼を頂き本当に光栄なことです、学問で expert となった訳でもなく、ましてや病院管理者としての履歴は始まったばかりですので、ご紹介出来ることは本当に少ないと思います。そこで、同窓の皆様に expert の立場というより、二回生からのお便りとして、私の略歴と勤務する筑波メディカルセンター病院（以下 TMCH）の紹介をまとめさせて頂きました。

卒後研修

1981年3月に卒業し、進路については大いに悩みましたが「体一つで食べてゆけるかも」などと安直な考えから外科を選び、憧憬の強かった循環器外科を志すことになりました。筑波大学附属病院はパイオニア精神にあふれ、卒業生もいまだ少なかったため、迷うことなく筑波大学附属病院外科レジデントコースを選択しました。当時は志望者が多く、最終的に循環器外科の同期は3名となりました。選抜の基準は今もって不明ですが、学業成績でなかったことは私が証明していたように思います。

レジデントの間、4年目に国立循環器病センター心臓血管外科へ1年間出張しました。この時、全国から集った同期や先輩に、日本の心臓外科を担う人材が多数存在し、彼らとの親交はその後の私の大切な財産になりました。奇しくも大阪

からの帰筑はTMCHの創設年にあたり、福田幾夫 現弘前大学教授のもとで1年間勤務させて頂きました。その後筑波大学附属病院チーフレジデントを1年努め、再びTMCHへ舞い戻りました。
研究活動について

生来、機械好きで、師事した堀 原一、三井利夫両名誉教授の影響もあり研究の興味は自然と人工臓器分野になってゆきました。卒後8年目には堀名誉教授のご高配で、能勢之彦教授が主宰する米国 Ohio 州 Cleveland Clinic, Department of Artificial Organs に留学の運びとなりました。彼の地で小口径人工血管の開発に携わるはずでしたが、研究部内の権力抗争に巻き込まれ3ヶ月で実験がストップ、意地でも帰れない鬱々とした日々を送ることになりました。この窮状を家族ぐるみで救い、人工心臓実験の手ほどきまでして下さったのが、同時期に留学していた富永隆治 現九州大学教授、塩野元美 現日本大学教授でした。今でも親しくおつきあいさせて頂いており、私の心の拠り所でもあります。

Clevelandで1年過ごした後、ひょんなことから能勢教授が Texas 州 Houston の Texas Medical Center 内にある Baylor College of Medicine, Department of Surgery (ME DeBakey 博士主宰) へ転勤となり、同道させて頂くことになりました。

た。Ohio から Texas へ1500マイルを 2 度も自家用車で走り、立ち上げ早々お金のない実験室のため、稚拙な英語で実験用のサンプルを無心したり、現地の実験助手たちと実験用器具の手作りもしました。仕事のない日々から解放され、馬鹿馬のように、そして生き生きと仕事をこなした時代です。ここでの生活は私にとって夢の中の出来事であり、何ものにも代え難い貴重な経験の連続だったように思います。この時の研究テーマは「小型遠心血流ポンプの開発」であり、後に日本のメーカーが製造販売し、私の学位論文にもなりました。

臨床医学系外科にて

Texas での研究を約 1 年で切り上げ、1991年には筑波大学臨床医学系外科の講師に呼び戻して頂きました。履歴の如く臨床は国立循環器病センターでの約 1 年間、研究は米国留学中の 2 年が最大の基盤であり、両分野とも力不足は明らかでしたので、人工臓器をメインテーマとした臨床研究に尽力しました。在任の13年間に、血管外科では脳分離体外循環法導入、自作ステントグラフトによる胸部、腹部大動脈瘤血管内治療、重症心不全に対しては、補助人工心臓、心室再同期療法の導入、頻脈性不整脈治療には植込み型除細動器の導入などを主導することができたと自負しています。この時代、ロボットスーツで名を馳せた構造工学系 山海嘉之教授と補助人工心臓の共同研究を手掛けたことも良い思い出の一つです。

2002年に助教授に昇任し、翌2003年に TMCH へ移動となりました。

筑波メディカルセンター病院にて

診療部の部長職と心臓血管外科の科長職兼務として着任、成人心臓血管外科手術に明け暮れる毎日でした。二回生で、頼れるパートナーの野口祐一統括副院長（循環器内科）から全面的な支援を頂き、「苦しい時の野口詣」を何回繰り返したか記憶にないほどです。本当に感謝に堪えません。2005年4月に医療安全を管掌する副院長となり、2009年5月からは病院長を拝命する事となりました。政権交代と医療崩壊のまゝ只中、本流の中で舵取りならず、転覆しない方策を模索する毎日

が続いています。

TMCH の概要

恐らく同窓の方の多くがご存じの TMCH は「筑波大学附属病院のすぐ側にある救急病院」のイメージでしょう。このイメージは当院の出自をひも解くと正に根幹であり、また一方で一部にしか過ぎません。そこで、TMCH をもっと知って頂くため紙面をお借りして概要をお話しします。

病院は茨城県、茨城県医師会、土浦市医師会、つくば市医師会、筑波大学が協力連携し設立した「財団法人筑波メディカルセンター」を母体とし、1985年科学万博開催に合わせ救急医療を担う目的で開設されました。その後、財団は総合健診センター、在宅事業（病院を含み直営三事業）、筑波剖検センター（補助事業）、県立看護専門学校（運営受託事業）と、財団寄付行為の中にうたわれる「包括的地域医療充実」を具現化する方向で機能の充実を図ってきました。病院もこの理念を裏付けるため1999年に、本邦10番目の「地域医療支援病院」のタイトルを獲得しています。地域医療支援は TMCH そのものであり、我々の“医療の振りかご”です。救急医療は地域医療支援の一部にしかすぎません。振りかごの中には、409床の中で実現できる救命救急センター、茨城県地域がんセンター、臨床研修病院、災害拠点病院などの様々な機能が盛り込まれており、これらを活用する事で地域の医療を支援したいと考えています。

救命救急センターは、県内 4 カ所の三次救急医療施設の一つに指定されています。ドクター・ヘリやドクターカーなどの先進医療を導入する一方、優れたトリアージ制度のもと独歩来院から最重症にまで対応する ER 型救急外来を運営しています。

茨城県地域がんセンター（地域がん診療連携拠点病院）では、罹患数の多い各種がんの集学的治療をおこなっています。終末期の疼痛対策のみならず、診断初期から積極的治療としておこなう緩和医療も導入されており、さらに、乳がんは健診から診断、治療、終末期までを統合的に管理するプレストセンターが配置されました。

小児医療では、地域医師会との間に「小児救急

医療に関する支援協定」が結ばれ、地域の開業医により TMCH の小児休日夜間救急診療を担って頂いています。災害拠点病院としてはヘリポートを併設、災害派遣医療チーム（DMAT）を編成し、常時訓練をおこなうことで災害時の医療提供に備えています。最後に、臨床研修病院として「地域医療に貢献できる医師」の基盤を構築できる研修教育に力を入れ、6年連続フルマッチを達成しています。以上、TMCH が「地域医療支援」のキーワードを大切にしている事がお分かり頂けたでしょうか？

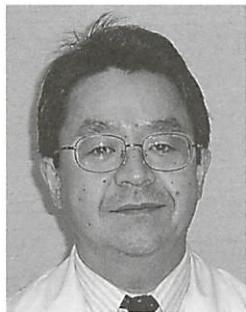
おわりに

最後は病院の宣伝になってしまい申し訳ありません。地域医療支援病院は特定機能病院と異なる

目的を担っています。各々の役割を活用する事で互助互恵関係が必ず築けると私は信じています。同窓の皆様、そしてこれから卒業する学生諸君、是非当院を活用してみてはいかがでしょうか。

連絡先

〒305-8558 茨城県つくば市天久保 1-3-1
財団法人筑波メディカルセンター
筑波メディカルセンター病院
病院長 軸屋 智昭
TEL : 029-851-3511 FAX : 029-858-2773
E-mail : jikuyat@tmch.or.jp



Change and Move

自治医科大学 外科学講座 呼吸器外科部門

教授 遠藤俊輔

私は1984年に筑波大学を卒業し、25年経った現在、自治医科大学と附属さいたま医療センターの両呼吸器外科部門を担当しています。自治医科大学は、両部門で肺癌230例を含む年間550例の手術を行っており、全国でも有数の呼吸器外科施設となっており、外科医としては充実した生活がおくれていると思っています。他方、仕事量の多さなど種々の問題について思い悩んだりすることもあります。自分がこれまで歩んできた道のりを振り返りながら、今考えていることを述べたいと思います。

呼吸器外科を専門に

私は大学卒業後筑波大学附属病院外科レジデントに就職しました。外科を選んだ理由は、“外科は知力より体力だ”との言葉に引かれ、多くの同級生とともに決めたものでした。2年間の研修後に恩師で当時、講師であった蘇原泰則先生が専門としていた科であったことと肺癌が今後増えそうだと思い呼吸器外科を専門にすることにしました。

モントリオールへ留学

その後は、外の病院で消化器一般外科研修、大学病院で呼吸器外科研修を行っていましたが、卒後5年半頃、突然、蘇原先生から、「カナダに研究員の席があるが、アイスホッケー部出身の君にぴったりだ」と言われ、二つ返事でこれを受け1989年9月にモントリオールのマギール大学に留学しました。マギール大学での私の研究の内容は、呼吸器外科と関係のない“血管内の血流パターン”がテーマでした。この研究方法は、モデ

ル血管内に100ミクロン前後のビーズ玉を混入した液体を流し、そのビーズ玉の動きを高速シネフィルムで撮影し、ビーズ玉の軌跡を追いながら流線を描出し、流体を解析するというものです。現在のようにコンピューターによる解析ができない時代、大変、根気のいる仕事でしたが、私なりに熱中し、充実した研究ができました。私生活でもアイスホッケー部出身の私にとってモントリオールは本場ホッケーを楽しめた最高の場所であり、このままここに永住したいなとも思ったものでしたが、full-time の研究員として生活できるほどの能力もなく、帰国することになりました。

自治医科大学胸部外科へ

帰国後は、恩師の蘇原先生が転任された自治医科大学胸部外科学教室に1992年1月から助手として入局しました。呼吸器外科が専門でしたが、こちらの医局は診療面では心臓血管外科手術も一緒に行う体制でしたので、多くの心臓大血管の手術に参加することができ、心臓血管外科手術を併用した呼吸器外科手術や周術期の循環管理について非常に勉強になりました。

一人診療科長となる

1998年には、宇都宮社会保険病院に出ていた後輩医師が大学に復学したいと強く希望したことから、宇都宮社会保険病院に一人科長として出向することになりました。新たな職場での初めての責任者として毎日が緊張の連続でした。医員がおらず、大学から手術の応援を得られない時などは、他の科の先生に手伝ってもらいながら、手術を行ってきました。何事も一人であったのですべ

ての責任が負わされる反面、行ったものはすべて自分の実績になる充実感を感じができるようになりました。大学病院に追いつけ追い越せとの意気込みで、肺癌や気胸や静脈瘤・ペースメーカーなど2年間で270症例の手術経験を積むことができました。

再び大学へ 講座再編

2000年には、大学病院の人手不足という事情から大学に戻ることになり、この時に講師に昇進しました。そして、2001年には、講座再編に伴い胸部外科が心臓血管外科と呼吸器外科に分離され、大所帯であった医局が急に少人数構成になってしまいました。一方、呼吸器外科の症例数は急増していったため、さらに多忙となり馬車馬のように病棟・外来・手術・研究・教育をこなさなければなりませんでした。2002年からは、現在、筑波大教授の佐藤幸夫先生が筑波から自治医大に赴任され、手助けをして頂いて大変助かり、感謝しています。

埼玉へ

そんな状態で、4年ほど過ごしていたところ、自治医科大学附属さいたま医療センターの呼吸器外科医が急遽転任することになり、後任者として、やむを得ず私が転任することになり、2005年から埼玉県の大宮での生活が始まりました。こちらでは准教授に昇進し、呼吸器外科として消化器外科から独立し診療科長になりました。こちらは人口も多く、病院自体の評判が良かったせいか呼吸器外科が独立するや症例は急増し、もう一人のスタッフとともに肺癌100例を含む年間250例の手術をこなさなければならない状況になってしまいました。過酷な日々にストレスがたまり、週に最低2回は大宮で飲み食いしメタボが一段と悪化したもの、外科医として充実した日々を送ること

ができ大変満足していました。自宅も近く通勤しやすく、このまま埼玉で骨をうずめる覚悟でした。

再び栃木へ

2008年、恩師の蘇原教授が急遽退任されることになり、同年10月から、自治医科大学病院とさいたま医療センターの二部門を教授として担当することになりました。週に3日は栃木で2日は大宮で連日手術を行う他に、教育や学会活動とこれまでなかった内容の仕事が増え、四苦八苦しながら東北線の大宮駅と自治医大駅を往復しております。車ばかりで電車に乗ることはなかったのですが、今は電車通勤しながらぼーとしたり、寝てみたり、本を読んだりとストレス発散の貴重な時間となっております。

Change and Move

私は気が小さく心配性で、海外での研究生活を始めた時や診療科長として大学から出向した時には、環境の変化の中でプレッシャーにつぶされそうになったこともあります。また日々、自分が責任者となって行う手術の時もそうで、予想しない変化によりまったく先が見えなくなっことも多々ありました。このようなときこそ“苦しいときこそチャンスはある” “激流も川幅が広がれば緩やかになる”との信念でなんとか頑張ってきました。

前任の蘇原泰則先生は、2008年に“Change and Move”というテーマで日本呼吸器外科学会を主催され、大学を去られました。変化があってこそ物事は動いていくものだという意味で、私や医局に対して提起された言葉だと思っています。めまぐるしく変化する今こそ、常にこの気持ちを忘れずに人生を歩んでいこうと思っております。

E-mail : tcvshun@jichi.ac.jp

会費納入のお願い

桐医会会員の皆様には、日頃より桐医会の活動にご理解とご支援をいただき、誠にありがとうございます。さて、今年度の会費を下記のいずれかの方法で納入くださいますよう、お願い申し上げます。

支払方法	用紙	期限	手数料*1	備考
郵便局振込み	同封の振込用紙	なし	100円	*2
コンビニエンスストア振込み	同封の振込用紙	2010.6.10	100円	全国ほとんどのコンビニで利用可能
口座振替	同封の申込み用紙に必要事項をご記入の上、押印して返送して下さい	~2010.6.10 (申込〆切) 2010.7.27 (引落し日)	100円	ほとんどの金融機関は「NSトワイカイ」と印字*3
桐医会事務局での現金払い	なし	なし	なし	月～金の 9:00～16:00

* 1 年会費は従来通り3000円ですが、手数料など必要経費として100円をご負担していただいております。また同封した振込用紙には平成22年度までの滞納分も含めて請求させていただきました。

* 2 郵便局での払込みには納入期限はございませんが、納入金額の過不足が発生しないように最新の払込用紙のご使用をお願いいたします。なお、古い払込用紙は破棄してくださいますよう、よろしくお願ひいたします。

* 3 一部の金融機関では別の表記で印字される場合もございます。

皆様のご理解とご協力を^お願い申し上げます。
なお、ご不明な点は桐医会事務局までお問い合わせください。

桐医会事務局
筑波大学医学同窓会
E-mail: touikai@md.tsukuba.ac.jp
Tel&Fax: 029-853-7534

事務局より

桐医会事務局（学系棟4階ラウンジ485）は月～金の9：00～16：00原則的に事務員がおります。
年会費の現金払いも受け付けております。お気軽にお立ち寄りください。

計 報

ご逝去の報が同窓会事務局に入りました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

名誉会員 澤口 重徳先生 (平成21年10月7日ご逝去)
尾形 悅郎先生 (平成21年11月1日ご逝去)
正会員 佐藤 英樹先生 (27回生) (平成21年7月ご逝去)
中村 裕子先生 (15回生) (平成22年2月14日ご逝去)

第30回桐医会総会のお知らせ

日 時：2010年5月22日（土） 16：00～

場 所：筑波大学医学群 4A411

多数のご参加をお待ちしております

お詫びと訂正

会報No.66 目次におきまして、Experts from Tsukuba 鈴木 利人先生（2回生）は（3回生）の誤りでした。

ここにお詫びして訂正いたします。

不審電話にご注意を！！

最近、卒業生、桐医会事務局、教官を装っての不審な問い合わせが続発しております。その手口も巧妙化しており、医療関係者や家族を狙った事件も発生しております。

桐医会事務局が直接先生方のご自宅・ご勤務先へ電話をしてご本人や同期生の個人情報の確認をすることはありません。

不審な問い合わせ等に対し、会員の皆様、ご家族様におかれましては、即座にお答えにはならない、折り返しの連絡先を確認する等くれぐれもご注意下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。

桐医会事務局

編集後記

今年度も残りわずかとなりました。卒業を間近に控え、授業が終わった後の講堂の前を歩きながら6年間を振り返ってみました。入学とほぼ同時にララガーデンができました。つくばセンターにはTXがつながり、研究学園にイーアスつくばができました。大学では、追越食堂は閉店し、保育所がスタートました。学群棟は改修され、新病棟の建設が進められています。流れる時間の速さを実感せずにいられません。慣れ親しんだ桐医会室や会報の発送作業の手伝いもこれで最後になるのかと思うと、なかなか感慨深いです。 (K.E.)

筑波大学附属病院内
財団法人 桐仁会

Tel 029-858-0128
Fax 029-858-3351

桐仁会は、保健衛生及び医療に関する知識の普及を行うとともに、筑波大学附属病院の運営に関する協力、同病院の患者等に対する援助を行い、もって地域医療の振興と健全な社会福祉の発展向上に寄与することを目的として設立された財団法人です。

1. 県民のための健康管理講座
2. 筑波大学附属病院と茨城県医師会との事務連絡
3. 臨床医学研究等の奨励及び助成
4. 病院周辺の環境整備
5. 患者等に対する援助
6. 患者様、教職員及び見舞い等外来者の方々のために、次の業務を行っております。

●売店

飲食料品、果物、日用品、衣料品、書籍等、及び病棟への巡回販売

●薬店

医薬品、衛生・介護用品、化粧品、診察・診断用具(打鍼器等)、聴診器リットマンキャンペーン

●窓口サービス

付添寝具の貸出、貸テレビ、宅配便、FAX、切手類、レンタル電話

●その他

各種自動販売機、公衆電話、コインランドリー等

●喫茶室

●食堂

●理容室

郵便はがき

3 0 5 8 5 7 5

恐れ入ります
が50円切手を
お貼り下さい、

茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学医学群内

同志会 桐医会事務局 行

————通信欄————

郵便はがき

3 0 5 8 5 7 5

恐れ入ります
が50円切手を
お貼り下さい、

茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学医学群内

同志会 桐医会事務局 行

————通信欄————

※ご自宅の住所、電話番号は、名簿には掲載されません。

事務局の連絡用に、ご記入をお願いします。

変更届・訂正届

年　月　日

フリガナ	回 生		名簿・会報等の送り先
氏 名 (旧 姓)			<input type="checkbox"/> 現住所 <input type="checkbox"/> 勤務先 <input type="checkbox"/> 帰省先
現住所	〒 所 在 地		E-mail ※ TEL ※ FAX
勤務先等	〒 機 関 名		TEL FAX
	専 門	職 名	

<変更・訂正個所> 氏名 住所 勤務先 その他

※ご自宅の住所、電話番号は、名簿には掲載されません。

事務局の連絡用に、ご記入をお願いします。

変更届・訂正届

年　月　日

フリガナ	回 生		名簿・会報等の送り先
氏 名 (旧 姓)			<input type="checkbox"/> 現住所 <input type="checkbox"/> 勤務先 <input type="checkbox"/> 帰省先
現住所	〒 所 在 地		E-mail ※ TEL ※ FAX
勤務先等	〒 機 関 名		TEL FAX
	専 門	職 名	

<変更・訂正個所> 氏名 住所 勤務先 その他

桐医会会報 第67号
発 行 日 2010年3月15日
発 行 者 山口 高史
編 集 桐医会
〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学医学群内
医学同窓会 桐医会事務局
E-mail: touikai@md.tsukuba.ac.jp
Tel & Fax: 029-853-7534
印刷・製本 株式会社 イセブ